

講演 “全カリ・マジックとは!?” ～教養教育のデザインとガヴァナンス～

日 時：2014年7月18日(金) 17時30分～19時00分

場 所：池袋キャンパス 8号館2階 8202教室

◆ 講 演：

佐々木 一也

本学文学部教授

全学共通カリキュラム運営センター部長

※この特別企画は2014年度第2回総合教育科目担当者連絡会の一部として行われました。

○**進行** それでは、全カリ運営センター部長の佐々木による特別講演「全カリ・マジックとは!?’」を始めさせていただきます。佐々木先生は哲学、ハイデガーの研究などをされるかたわら、大学教育学会常任理事、そして大学教育研究グループの指導をしています。それらの経験から、本日は「教養教育のデザインとガヴァナンス」ということについて、お話いただきます。では、よろしくお願ひします。

○**佐々木** 皆様、こんにちは。お忙しいところ



佐々木 一也

足をお運びいただきまして、まことにありがとうございます。今年度、全カリ部長を拝命しております文学部の佐々木と申します。

本日のお話のポイント

トは、立教の全学共通カリキュラムはどういう経緯があって、どういう性格を持っている組織であるのかということ。そして、その全カリの特性が学生の関心、つまり、大学生として学んでいる専門性や、今後普通の社会人となる学生、また1人の人間として生きてゆく学生の就職や生活にどのようなつながってゆくのかということ。さらに、立教大学が学生をそれらとどのように結びつけて効果的に教養教育を進めようとしているのか、そしてそのためにどのような教育システムを組んで、どのように大学運営を進めようとしているのかということ、などです。

1. 立教大学の不思議

まず、「立教大学の不思議」と言われているものがあります。なぜこんなことができるのだろうかと他大学の関係者からよく言われることです。1つは、立教では学部間の連携ができていくということ。それから2つ目、いわゆる「大綱化」があった1991年からもう20年以上になりますが、その当時のカリキュラム改革の精神がずっと維持されてきていることです。「専門

性に立つ教養人の育成」、これは全カリ設立時に初代の全カリ部長だった寺崎昌男先生が述べたスローガンですが、今もこの言葉は大学全体で使用されています。また、3つ目は全カリの運営体制についてです。コアメンバーと呼ばれる数名の教員でメンバーの交代を繰り返しながらも、20年ずっと運営することができています。それからもう1つ、主題別Bという種類の科目があります。これは複数の教員が担当し、教員が自ら提案できる科目なのですが、これに多くの教員が非常に自発的に携わっていることも「立教大学の不思議」と言われています。

学部間の連携、運営体制

さて、それぞれ詳しく見ていきたいと思います。まず、「立教大学の不思議」の1つ目に、さまざまな形で学部間の連携が行われていることがあげられます。一番象徴的なのは、全カリ運営センター委員会というものです。全カリを運営する委員会組織のように聞こえますが、これは「全カリ運営センター」という実体のある運営組織の最終意志決定機関です。各学部の教授会に相当するようなものです。各学部長が委員となっているため、全カリは各学部の意見を公に反映することができ、さらに全学部が支えるという原則が維持されるということになります。

続いて、「コアメンバー」という仕組みをずっと維持しているということも、先ほど申しました。1991年の大綱化から、本学でもいろいろな体制の変更がありました。その間も、いろいろな学部の教員が全カリを支えてきました。初代の全カリ部長は文学部でしたが、2代目は法学部、その後は社会学部、理学部となり、また文学部に戻って、経営学部、文学部というよ

うに、いろいろな学部の教員がその重責を担ってきたということがわかります。それから、全カリは言語と総合の2つの部門に分かれているのですが、現在、総合構想・運営チームのリーダーをされている中島俊克先生は経済学部です。こちらでも文学部、理学部、経済学部と複数の学部で交代をしながら全カリ総合チームの運営を担ってきました。そのほか、専門委員、研究室主任、チームメンバー、研究室員といったその時々いろいろな役職に、多岐に渡る学部の、多様な教員たちが常に参加して全カリを支えてきました。

「専門性に立つ教養人の育成」

全カリでは「専門性に立つ教養人の育成」ということがスローガンになっております。91年の大綱化よりも前は、「教養ある専門人の育成」ということを、立教大学の共通理解として持っていたのですが、初代の全カリ部長の寺崎先生が、「専門性ある教養人の育成」とひっくり返したのです。スライドに「学問の進歩と学生の意識変化」とありますが、全カリ設立時、専門課程の2年間では専門は教えきらない、あるいは、教養課程の2年間でも教養は育たないという意見が学内で多くありました。そこで、「専門性に立つ教養人の育成」というスローガンのもと、4年間で一貫して学生を育てるということになりました。この4年間を通じての学びを最近では「学士課程」と言っていますね。そして、そのときにできた方針を歴代の総長が支持し続けてきたということも、立教大学の特徴でもあります。

主題別B科目

主題別B科目も不思議だといわれて

きた全カリの目玉科目の1つです。複数の教員が担当することで、教員同士の論争が行われることもあり、それを体験できることも科目の特徴となっています。特に初期の頃は、あまりに先生同士が激しくやり合うものだから、学生が心配になってしまって、「あの先生同士、仲が悪いのですか」と聞きに来ることがあるぐらいでした。これも、学際的方法論を実演してみせることができたという成果であり、現在もその精神は維持されています。担当する教員の負担を考えて、主題別B科目では1科目当たり3科目分の兼任講師コマが使えるのも特徴です。さらに、職員も一緒に授業の企画を行う科目があるのも特徴ですね。

2. 全カリ・マジックという力の源

さて、続いて全カリでこのようなことができる力の源について、お話したいと思います。まず、歴史的経緯についてです。立教大学というのは1874年にアメリカの聖公会の宣教師が建てた学校なのですが、日本の法令上、1907年に専門学校令という法令によって、「立教大学」と名乗ることが許可されました。そのときに、文科と商科という2つの学科ができ、これが後の文学部と経済学部になっていきます。ですから、今の立教は、文、経、理、社、法と数えていくのですけれども、文学部と経済学部が一番古くて伝統のある学部だということになります。この当時の商科のカリキュラムには英語や倫理学、法律、経済などがありました。いずれも週31時間の時間割カリキュラムなのですが、その半分以上が英語でした。「英語の立教」と言われる所以はこういったところにあるでしょう。そして、設立当時から教養教育を重視していたということになります。

そして、ご存じのとおり、1991年に「大学設置基準の大綱化」が起きました。それまで一般教育課程ということで、法的な根拠があった54単位が、極端に表現すると、やらなくてもいいということになりました。大綱化では、日本の多くの大学が「脱・教養路線」に走りました。邪魔で異物感の強かった教養部をなくし、1年から専門をやろうと考えていた大学が多かったのです。しかし、そのとき立教は、文、経、理、社、法の5学部の主な教員たちが集まって、「俺たちに教養教育をやらせろ」という動きが起こったのです。当時、一般教育部という国立大学の教養部に相当する組織があったのですが、それを廃止して、新しく全カリ運営センターができました。設立時の委員会には、学部長経験者や、これから学部長になるであろうと目されるような学部のエースたちが出てきて、自主的にこの全カリをつくっていくということになりました。だから、単なる委員会ではありません。もちろん教養部のようなものではないため専任教員はいませんが、力がある組織だったということです。そして、この教養重視の方針は、文学部の塚田理先生、経済学部の大橋英五先生、文学部の押見輝男先生、そして現在の吉岡知哉先生など、全カリができて以降の全ての総長に引き継がれてきました。皆さん「専門性に立つ教養人の育成」というスローガンを堅持して、必ずこれを掲げてきたのです。これはとても大事なことで、全カリ運営センターの活動に、総長として積極的な支援を与えるという姿勢を一貫して示してこられたということです。そのため、これまで全学で支えるという体制が維持することができました。

その全カリには「公的性格」というものが与えられました。言い換え

れば、全学部に開かれているため全カリはどの学部にとっても公のものであり、各学部の事情は私の事情、という位置づけが確立したということです。それから、全学部とカリキュラムの整合性を図らなくてはなりません。これは今、立教では課題になっていて、2016年度から実施予定の「学士課程統合カリキュラム」とつながっていきますね。それから、学部のディプロマ・ポリシーとの調和も図らなければいけないのです。全カリは教養教育なので、学部にとって攪乱要因ともとらえられるのですが、最終的には立教大学全体としては、学部があって全カリがあるということで調和がとれているという形になります。また、予算も、全カリを扱うことによって各学部の予算を削られてしまうわけですが、そういうことについても、各学部には理解していただいています。

それに加えて、職員力の高さも力の源のひとつです。職員力というのは、いろいろなことがあります、大事なものは教員と対等にコミュニケーションができるということです。それから、学生とカリキュラムを見つめる職員の目の高さも重要です。教員ももちろん学生とカリキュラムを見ているわけですが、教員はどうしても自分の専門性という極めて濃い色眼鏡をかけて見てしまいます。学生そのものや、カリキュラムそのものは、なかなか客観的に見にくい立場にあり、その点、職員のほうが目は確かだということも経験的に実感される方も多いのではないのでしょうか。それから、最近は専門性のある職員も増えてきました。研究的専門性とか、大学運営的専門性などありますけれども、大学院で勉強しているような職員もたくさんおられます。職員の特徴としては、外部環境情報に大変強いということです。ですから、最近で

は「カリキュラムマネジメント」と言ったりしますが、教員を説得しながらカリキュラムをつくって運営し、検証し、そして改革し、さらに新しいカリキュラムを実行していくことが職員にできるというのも特徴であります。

3. 全カリが目指す総合教育カリキュラム

さて、そこで全カリが目指す総合カリキュラムについてお話していきたいと思います。私がここで強調したいのは、まず、教養教育としては、人間、社会、自然をとらえるという全体的なまとまり、あるいは、全体性に重きを置きたいということです。学部の役割というのは、専門性を重視していますよね。経済学部だったら、「経済学」という、厳密な専門性でもって世の中で起こる現象を見て、それを学生に「これが学問だ」といって教え込むわけです。一方、学生は経済学だけを使って生きているわけではありません。彼女とデートに行くときに「幾らかかるかな」というのは経済学かもしれませんが、「愛しているよ」というのは経済学ではないわけです。そういう意味で、多様な視点で人間は生きている、つまり、全体性の視点を確保するというを私は重視しています。学部が扱っていない複合領域、学部学科から越境していくということ、それから、学部学科の専門知に対して、そのまわりの専門との連携を図るネットワークとしての知、そういうものを教養として考えていきたいと思っています。同時に、立教の全カリでは、大学生として学んでいくという姿勢を定着させることも目指したいと思っています。さらに、それがただ知識として、頭で知っているということではなくて、それで体が動くということが、真

の教養であろうと考えていまして、立教の総合科目はこういったものを目指すものであってほしいと、私は思っています。以下、全カリの目指す総合教育カリキュラムの特徴について一つ一つお話ししようと思います。

全体を見る目

まず、「全体を見る目」についてお話ししたいと思います。総合科目は科目ごとに複数の科目群に分かれています。主題別A科目群は、さらに「人間の探求」、「社会への視点」、「芸術・文化への招待」、それから「身体への着目」、そして、「自然の理解」という5つのカテゴリに分かれています。先生方がご担当の科目はどのカテゴリに属しているのでしょうか。私はそれらすべてで1つのカリキュラムなのだと考えています。単に雑多であるだけでは困るかもしれませんが、ひとまとまりとして、人間、自然、社会を受けとめる目を養ってほしいと思っているのです。

その全体性というのはどういう属性を持っているかと申しますと、それは曖昧かもしれないし、複数の意味を持っているかもしれません。あるいは、奥義みたいな、何かわからないけれども非常に重要な思想だったりするもの。あるいは、深くて、冷静に分析しきれないような何かで、はっきりしないもの。それでいて現実に自分を構成している何か。そういうものを私は全体性と言っております。

大学では専門性を教えることによって、学生たちが社会人として生きていくのに資するような教育をしようとしています。しかし、専門性というのは、対象の部分的な性質を明らかにするのですが、そうすると、専門性によって対象はいろいろ違う姿を示してし

まうのです。それは、人間は同時に複数の意味を帯びて生活しているからです。例えば、家庭ではお父さんでも、世の中に出ると非常に厳しい、苛酷な商売の営業マンであったりするということです。そして、そういった全体性を持つ性格を具体的に解決するために使われる専門性には、有効な特殊目的があるのだということは、しっかりと押さえておく必要があります。だから、専門性と全体性の両方に目を配る必要があると思うのです。

創造性

大学生として学ぶ精神というのは、専門性と全体性の両方を追っていく力を身につけること、特に全体性に対して志向性を持つということだと思うのです。そのために、学生たちには「創造性」というものを持ってもらいたいと、期待しているのです。

大学での学習はただただ知識を覚えていくという、高校までやってきたことと違います。具体的な事象に即して、それをその専門性に合った切り方で切って、しかもその対象の具体的実態を見るということ、つまり全体性を志向することが必要になってくるのです。しかし、学生は全体性について自分でしっかり自覚しているわけではありません。また、覚える知識でもって勉強することが肝要だと思っている部分もあります。生活自体が親の保護のもとで、リアリティのない生活をしているわけですからね。そこで全体性を志向するためにはなおさら、創造力、つまり何かをつくっていく新しい力というのが求められてくるのです。そして、創造性を身につけていくためには、主体的な経験が不可欠だと思うのです。

所属学部からの越境

そのためには、所属学部、学科から越境ということをやまにはやる必要があると思うのです。具体的対象、全体性を知る必要。専門性の有効な目的を見分ける必要。専門以外の領域、複合的学習の必要などと今お見せしているスライドにいろいろ書いていますが、要するにこれは所属学部・学科の専門性から少し外れて知的経験をすることが必要なんだということです。そういう意味で、全カリ総合科目は1年生から4年生までに等しく開放されていて、どの学年でも自由に、どの科目も選択できるということを原則としています。できれば、3、4年に学習することが私は有効だと思っています。というのは、専門性がある程度身についたほうが、より具体的にその専門性の特性と、他の専門との違いが分かってくるので、全体性、複合性というものについて具体的なイメージが持てるからなのです。そういう意味で、特に主題別B科目というのは、全体性というのを多少意識していただいたテーマで行っていただければありがたいと思っています。

ネットワークとしての知

さて、「ネットワークとしての知」というのがあるのですけれども、これは先ほどの話の言い換えとも言えます。専門性というのは、全体性のすべてを見ることができないわけです。つまり、専門性はやはり専門性であって、ほかの専門性を基礎づけられない、お互いに相対しているという性格を持っているということです。専門性というのは、必ず自分を中心にして他の専門性を自分の周りにネットワーク化するという性質があるんですね。

できれば、自分の専門性でもってすべてを説明してしまいたいところです。しかし、残念ながらそういうことはできないので、専門性をもって何らかの知的な活動をするためには、その専門性につながるネットワークで補う必要があるのです。ネットワークが細かく、柔軟であればあるほど、全体性を持つ具体的なものへ対処しやすいということになりますね。ですから、全体性を包み込むネットワークのようなものとして教養が機能するのではないかと考えております。

知の身体化

「知の身体化」とは知によって体が動くことです。先ほど申しました「ネットワーク的機能」というのは、体が動くことで初めて有効に機能するのです。そのためには、具体的諸問題に触れて、主体的関心と自ら考えて調べる行動力というものを身につけられるカリキュラムが必要で、全カリ総合科目はそういうものであってほしいと思います。講義を聞くことで学生がやってみたいと思う、そんな授業であっていただきたいと思います。また、学修成果を測定するということの重要性を、基準協会でも文科省でも言っていますが、私も大事なことだと思います。「知っている」というだけではだめだと思うのです。やはり体が動いて「新しいことができる」、「自分が変わった」、となることが大事だと思うのです。

ディプロマ・ポリシーの奥行

各学部・学科が持っているディプロマ・ポリシーというものがありますよね。そこで学ぶと学生がどうなっているかというものですが、それに全カ

りのなもの加わると、その専門性は鬼に金棒だと思うのです。立教のホームページをご覧になると分かるのですが、各学部のディプロマ・ポリシーの一番下の目立たないところに、確かに全カリのリンクが貼ってあるのです。全カリも一応、学部のカリキュラムの一部だからなのだと思いますが、しかしやはり、それではあまりにも形式的ではないかとも感じます。本当は各学部の授業方針の中に全カリとの関係が書かれたうえで、何ができるのか、自分の学部に入り、卒業すると、人間としてどのようなようになるのかなどが書かれていればなおよいと思うのです。現在、そういうことを書いている学部が1つだけあって、それは社会学部です。社会学部は、全カリのことを自分のディプロマ・ポリシーに組み込んで書いてあります。全学部ともこういうふうにやっていただきたいなと私は思います。全カリとの連携によって専門性の有効な幅が広がって、専門性だけでは見えない裏の領域、つまりディプロマ・ポリシーの裏みたいなものを知ることで全体性を知ることにつながっていくのだということを見せることができると思うのです。

4. 個々の科目とカリキュラムの関係

さて、続いて各科目をつくっていた際に、先生方にどのようなことを留意していただきたいかということをお話していきたいと思います。スライドには留意すべきことに「世界全体とのつながり」とまで書いてありますが、全カリのカリキュラムの中には、いろいろなつながりがあるのではないかと考えています。まずは個々の科目は単体で存在しません。先ほども申しましたとおり、複数の科目群が合わさって1つのカリキュラムをつくってい

ます。そして、1つ1つの科目も、お互いにつながり合っています。より複合的で、全体性に意を配った科目であってほしいとはいえ、それぞれの科目はもちろん大学の科目ですから、全カリの科目であっても専門性を持っています。それらは相互につながり合うことによって、その全体性を実現しているということがあってほしいなと思っています。

個々の科目と他科目のつながり

そのためには、個々の科目同士でつながっていることが必要だと思っています。それゆえ、「人間の探求」の科目をご担当の先生には、ほかの「人間の探求」の科目とはどういう内容だろうかと、ぜひシラバスを読んでいただきたいのです。そして、自分の科目はほかの科目の中で、どういう位置を占めているのだろう、どういう特徴があるのだろう、学生はどういう関心で自分の科目に来てくれているのだろう、あるいは、自分の科目を取った後、自分の学部へ帰って行くと、この学生はどうなるのだろうかというようなことを想像して科目内容をつくっていただけると、非常にありがたいなと思うのです。教養科目のカリキュラムというのは1つの全体であり、それは固定的ではないネットワークでつながっていて、常に微調整されながら、変動しています。これが教養科目の特徴です。専門科目と決定的に違うことだと思います。このことは、科目の運営とか、最後にお話することになるガバナンスとかいうことにつながっていくのであります。

個々の科目と立教大学全体のつながり

さて、まだ科目のつながりの続きがあって、個々の科目と立教大学全体とのつながりというものもあります。これは個々の科目、あるいは全カリのカリキュラムはいろいろなものからの影響を受けているし、自分も影響を与えているということです。立教大学は今、10の多様な学部があり、それぞれの学問的な違いや、場合によっては学部間の政治的な力関係というようなものがあって動いています。大学当局というものもありますよね。そういうものの力関係の中に全カリのカリキュラムはあるのです。そのような在り方をしているものが大学の学問であるし、個々の科目のあり方なのです。

そんな中で、個々の科目の担当の先生方は、自分の科目はこういう意味で立教大学の中に置かれていて価値があるのだと、自信を持ってご担当いただきたいと思えます。たまたまこの科目に当たったからやろうというのではなく、自分こそはこのネットワークの1つを支えている立教の教育の要であると思っただきたいですね。皆さんがそのような思いでご担当くださいますと、こういう関係が非常に活性化すると思うのです。

個々の科目と世界・宇宙とのつながり

さて、そういう科目は、大学の中にとどまらないで、これは果てしなく広がって、大きなものを意識していくようになると考えています。「宇宙の果てまで研究対象にしてしまう人間」と、スライドには書いてあります。これはどういうことかと申しますと、総合科目の主題として、世界の中の具体的な事象を扱っているというだけではなく、学びを通して学生が事象を包み

込んでいる世界、自然、宇宙に対してどういう姿勢で今を、そしてこれから生きていくかということにも影響を与えるということです。哲学者カントは18世紀終わり頃の人ですが、彼の有名な『実践理性批判』という書物の一番終わりに有名な言葉を書いています。「私が心から畏敬の念をもって感嘆するものが2つある。それは我が上なる星空と、我が内なる道徳律である」という有名なテーゼです。これは、自分の内面性と大宇宙が同じ原理でつながっているというカントの思想を表しているわけです。これこそが近代の人間なのだと思うのです。これが西洋の学問であり、我々が大学で勉強し、学生にも伝えたいと思っている学問の根本にある精神なのです。ですから、非常に大きな射程を持っている1コマを我々は担当していると、先生方には思っただきたいと考えています。「全体性を持つ具体的対象に対する身体化した知の獲得を目指す全カリ総合科目」と難しげな表現で書いてはありますが、要するに、授業でこの物事にはこういう意味があるということを教えるにしても、私は宇宙とは無縁の地上の人間で、この物事も宇宙規模で起こっているわけではないが、実は地上の出来事も究極的には宇宙につながっているのだ、というつもりで語ってほしいと思っています。

5. 学生の主体性

そういう科目に対しては、学生の側がそれに応えてくれなければいけないわけですので、次には、学生の主体的な学びということについてお話をしてみたいです。

まず、私が今お話ししてきたように全カリ科目を学生が履修するためには、学生の主体性はどうしても前提

になると思うのです。現状の全カリ総合科目は、カテゴリ指定というものがあります。例えば、立教科目群、領域別科目群から何単位、主題別科目群とスポーツ実習科目群から何単位取るなど、幾つかの指定があります。ただ、基本的には学生の自由選択に任されています。ですから、場合によっては、あってはいけないことですが、入学すると先輩が、堂々と大学の前の本屋で売っている楽勝科目が書いてある情報誌の存在を教えてくれたりすることもあります。立教にもあるかもしれませんが、いろいろな情報を得て、楽勝なものを選ぶこともできてしまうのです。しかし、それでは全く我々の本旨に合わないわけです。学習に対する学生の主体性がこの総合科目にとっては命であるわけです。これをどう覚醒させるかというのが、我々の今喫緊の課題だと私は思っています。

学生は自分の生活に全体性を持っています。たまたま高校を卒業するときに選んだ専門性のある学部に入っているだけかもしれませんが、その専門性が自分の全体性とつながる、そして、何らかの意味があるのだということに気づいてくれることにポイントがあると私は考えています。特定の専門を中心とするネットワーク的知というのは、全カリが目指す教養ですけれども、その形成には学生の主体性が不可欠なのです。主体性がなくて、ただただあちこちつまみ食いをしたら、雑多な知の集積にしかありませんよね。これが1つにまとまって体を動かせるようになるためには、自分の中で必然性があって、つながっていかなくてはいけない。それがネットワークで、それを形成するためには、主体性として学生が中心に鎮座していないといけないと思うのです。

さて、教養は教えられないとよく言いますよね。教養とはそもそも主体的に獲得するべきものだからです。あるいは、出席時間数とか授業への工夫などで学生を脅しつけ、強制するようなシステムでは、私が言っているような意味での学生の主体性はもちろん、教養というものも育たないと思います。

でも、学生には主体性がないということへの懸念は、今の大学で授業を担当する教員の一致した認識だと思うのです。なぜなのでしょう。学生がいけないと言えば、それで終わってしまうのですが、私はそうではないと思っています。主体性喪失は必ずしも学生のせいではない。それは、学生は大学で教えられているものに、それほどインセンティブを感じていないからではないかと思うのです。というのも、経営学部や経済学部などの学科等では、学生が多少アカデミックな訓練をされて得た即戦力になるような知見、あるいはスキルは、企業が高く評価することもあるかもしれません。しかし、特に文系の学生については、卒業後、営業、管理、総務などの仕事をする人が多いですよ。では、例えば、人事なら人事に特化した学問を専攻しなければ、勉強しなければ人事の仕事ができないかということ、そんなことはないですよ。文学部だろうと法学部だろうと経済学部だろうと、人事の仕事はしますよね。営業も、経営学部でマーケティングをやっていないとできないということはなく、文学部の学生も平気で担当します。つまり、アカデミックな訓練の成果を、日本の企業は全く意に介していないということです。私は、実は今を去ること40年前、就活をやったことがある希有な文学部の教員の一人なのです。文学部哲学科でしたが、まさか哲学は食えませんから、どこかで生きなければいけないと思って

就活もやったのです。ある会社に内定をもらい、後で断って怒られたのですけれどね。その会社の内定者の会で、「俺たちが全部教えてやるから、大学で習った要らないものは全部捨てろ、忘れろ」と言われました。企業は学生を選考するに際して、大学での教育成果と一緒にではなく素材部分しか見ていないということ、私は身をもって経験しました。だから、学生は大学でまじめに勉強したからといって就職に有利になるとは誰も思っていません。それから、かつては大学で教わる西洋文化は日本でエリートになれる証でした。しかし、そのようなことが通用したのは、戦後すぐくらいまででしょう。だから学生は、大学の中で教えられている知識自体に強いインセンティブを感じていないのです。

「社会に蔓延する大学外の知的興奮」とスライドにあります。面白い、あるいは知的な関心を喚起するようなものは、大学の外にたくさんあるのです。では、大学はどうしたらいいかということですね。私は、まず、学生たちに生活基盤の深層に気づかせる必要があるのではないかと思うのです。私が先ほど申しましたように、学生たちは高校までは、知って忘れる、忘れては知るという作業をしていると、おまえは頭がいい、といって褒められたわけです。しかし、体の生活は全部親がかりなので、どういう仕組みで世の中は動いていて、自分はどうして食べ物を食べられて、雨風にさらされないで家に住んでいるかということに、全然理解がないのです。驚くべきことですが、文学部の学生の中には、法律も知らない、経済も知らない、世の中の仕組みを全く知らない学生がたくさんいるのです。大学生なのに、先代の総理大臣は「えっ、誰だっけ」みたいなこともありますよ。つまり、生

活にリアリティがないのです。だから、学生たちは今の形で未来が保証されてはいないにもかかわらず、今の所与の就活システムの中で一生懸命やればいいと思っているのですよ。しかし、20年後、30年後、その就活で入った会社がそのまま存在して、自分をそのままの評価でずっと雇ってくれる保証なんて全然ないですよ。これももう有名なことで皆さんご存じだと思いますけれども、今、若い人は就職して3年で3分の1が離職するのです。これは去年、今年の傾向ではありません。もう20年以上、1990年代半ば以降は資料があつてずっと続いている傾向だと言われますよね。私の学生にも苦勞して入ったはずなのに、「やめました」という学生がいますからね。

彼らに気づいてほしいのは、今は昔と違うということ。もう日本の社会はいろいろな意味でどんどん壊れている。中から壊れていることもあるし、外から壊されていることもある。どんどん壊れて、どういうふうに壊れていくかもよく分からない。そういうものに備えて、対応できる力を身につけてほしいと思うのです。日本独特のジャパニーズスタイルのリクルーティング、この就活スタイルにこだわっていることも問題があると思うのです。こんなことをやっている国はないですよ。学生たちが本気で全体というのは何なのかということを考えないと命取りになると私は本気で心配しています。

6. カリキュラムの主体性

さて、そこで学生の注意を喚起するカリキュラム、つまり、主体性を喚起するカリキュラムをつくらないといけないということになりますが、それはカリキュラムに独自の主体性があると

きに発揮されるのではないかというのが私の考え方です。学生の主体性喚起と書きましたが、注意喚起とか関心喚起ではなく、主体性を喚起することが重要だと思っています。面白い授業をやるとか、学生の気を引く、食いつきやすい素材を使うとか、あるいは、学生が自分で体を動かすことによって、頭で考えるより飽きない何かをやらせるということは注意喚起、関心喚起にはなりますが、主体性の喚起とは違います。結局、最終的には学生がその後どのように学び続けていくかということは、その学生の主体性に任されてしまうので、主体性そのものをその授業で喚起するというのはなかなかできないと思うのです。しかし、カリキュラムが主体性を持つということをもう一度確認することによって可能になるのではないかと考えています。

では、その大学のカリキュラムというのはどういうふうにできていて、その主体性の根拠は何なのだろうかということを考えてと思います。大学のカリキュラムは研究者でもある教員の専門性と、学生と、大学ガヴァナンスの責任部局(大学当局や理事会)を通じて繋がる大学の外部社会、この三者によって構成されています。ですから、本来大学のカリキュラムは、ガヴァナンス責任部局を通して知る社会からの要求と学生の意欲が入って作られているはずでした。しかし、現在は教員が一方向的に作っているか、あるいは、この社会からの要求に圧倒的に力があるって、大学のカリキュラムを作らせてしまっている現実があるかもしれません。しかし、本来的には、この三者がバランスよく結びついて学問の自由が維持されてきたと思うのです。それをもう一度思い出すことによってこそ、学生が大学のカリキュラムは自分の学びだという自覚ができ、同時に主体的

にそれについていこう、引っ張られていこうという気になることができるのではないのでしょうか。それこそが学生の全体性に訴えるカリキュラムだと思います。

このカリキュラムに主体性があるという私の主張の根拠ですが、高校までのカリキュラムの性格と比べれば一目瞭然です。中等教育までのカリキュラムは教育の外部勢力によってつくられたものです。「指導要領」という法的拘束力があるわけですから。それから逸脱したものを教えてしまうと、教員は処分の対象になります。東京都は非常に厳しいですね。中等教育カリキュラム内容に関わる学会ももちろんありますが、地域社会なども含む外からの力によってカリキュラムはつくられてしまいます。それに対して大学のカリキュラムは、学問の自由というものがありますから、外部の力から自由です。つまり、大学のカリキュラムの主体性というのは、自立性と自由によって支えられているのだということです。また、内部の力というものもあって、教員が学問研究をやっている、ガヴァナンス部局が社会との関係で大学を営業体として維持している、それから、学生がそこで実感をもって活動しているということです。その内部の力が外部の力から守られることによって、その自立性が維持されています。こういうカリキュラムの主体性がきちんと維持されていると、その中にいる学生とは、ひょっとして自分が主人公かもしれないと思えるのではないかと思うのです。

学生の全体性は学生の生き様そのもので、自分の生き様に直接触れる経験をした場合に、学生は最もリアリティを持って自分が主人公だと思えるのではないのでしょうか。学習をやらされるのではなくて、自分の具体的な生活場

面との連続性をしっかりと認識することによって、その学問と自分の存在とのつながりを自分のものにするのではないか。それこそが学問が学生の主体性につながっているということなのではないかと思います。ただ、そのためには大学教員自身が、人間の全体性を賭けて学問を研究している、そして自分の全体性を維持するために役立っているということの、生きた見本となる必要があると思うのです。大学教員は研究者ですよ。研究者というのは、学問を創っている人です。学問を創っている人は、専門的な学問のディシプリンに従ってやっていますけれども、学問は初めからディシプリンでできているわけではありません。あるいは、研究者が「オギャア」と生まれたときから、「ディシプリン！」と言って、学問のディシプリンに入っていくわけではありません。普通の平凡な、ですが全体的な人間が、ある特定の知識、技能に触れて、それこそが自分が生きるために意味があるのだと思って、それを研究しているわけですよ。ですから、全カリの授業は完成した知識体系を演繹的に、テーゼを立てて、公理から定理を証明し、または公理と定理を組み合わせて別の定理をとというふうに、ユークリッドの幾何学のような説明をしていくものではなく、もうちょっと無骨でもいいから、自分が苦闘し、格闘してきたその過程の姿を学生に見せてやるものでもよいのではないか。むしろ、教養教育、全カリの総合科目としてはその方が有効なのではないかと思います。専門科目ではまずいかもしれないけれども、全カリ科目ではよいのではないかと思うのです。

例えば、2016年度から立教大学では大きなカリキュラム改革を予定していますけれども、「学びの精神」というジャンルを全カリの総合科目でつくる

ことになっています。それは授業にきちんと出て、大学生としての持つべき大学での生活習慣を身につけさせることをも目的としていますが、それと同時に、知の創出の現場に擬似的に身を置く経験ができるような内容を持った科目ができれば面白いと思います。そうすると、学生にとってそれは全体性への接近を経験する機会になるのではないかと思うのです。

グローバル化

さて、これからの大学教育には3つのキーワードが、今の時代にはあるのではないかと思います。まず1つはグローバル化ですね。今さら聞きたくない、という先生も多いかもしれませんが、でも、これは学生たちの日常生活の現実の根本にあるものの1つで、避けて通ることのできないことです。彼らの生活がなぜ壊れていくか。これは、やはり外からの影響です。護送船団方式の日本の行政指導が壊れて久しいわけですが、外圧を内に引き入れてしまうような勢力が今の日本にはたくさんいます。これはもうどうにもならないので、これに対応できていかなければ、もう学生の将来はないのではないかというぐらいに私は今思っています。

生活実感

もう1つ大事なことは、「生活実感」です。先ほど、研究の現場の話をしました。学生が生きる現場に即した、そういうカリキュラム、科目が必要なのではないかと思っています。学問と自分と全体性はつながっているという生活実感を得ることで、学問に守られていると実感でき、最終的には、学問をしたくなる逼迫感のような気持

ちを持つことができると思うのです。これはやはり「グローバル化」を直視したときに、もう一回、何のために知識が、知的営みがあるのかということを考える必要が出てきますよね。そのときに、専門性だけにとらわれない学習可能性の保障というのが重要で、全カリ総合科目はそのためにあるのだと思っています。

自己からの発信

もう1つ、キーワードとして、「自己からの発信」ということが大きいと思います。これは、学生に自分の知力の有効性を確認させるためのものだとスライドに書いていますが、つまり、生きた知的活動、体の動くようなものは、みずからの具体性に直接作用する知であるということなのです。このような知が機能するためには、PDCAサイクル、計画を立てて、それを実行して、それを検証して、さらにそれをフィードバックして、新しい実践につなげていくということが大切で、それを実践することが人が物を考え、経験して、認識して、そして生きていくということだと私は考えています。こういうことが個々人の中でできることで、学問が体を動かす、生きるものになるだろうと思っています。自己から発信すると、他者から、あるいは社会から反応が返ってきます。反応が来るということは、ヘーゲルではありませんけど、他者による否定によって自己を知るというプロセスであって、否応なしに他者と対話をしなければいけません。そうすることによって、自分がやったことをチェックすることになります。チェックし、さらにその相手に対処するためには、自分の行動を変えて新しい実践をしなくては行けない。そういうことをここで繰り返していくわ

けですね。そういうことを学生にやらせることが授業の中で重要だと思います。

教員からの応答も重要です。なかなか講義科目では一方的に話したままになりがちです。リアクションペーパーを集めても、相手が200人だと読むだけでも大変で、一々それに次の授業で応答なんかできません。せいぜい1枚か2枚です。しかし、なるべく細かく応答するということが重要だと思います。ですから、2016年度からの「学びの精神」では、発信と応答を重視したカリキュラムにできればと考えています。

7. カリキュラム・デザインとガヴァナンスの連携

さて、今までカリキュラム、科目、学生の話をしてきましたが、それらがうまく結びつくためには、このガヴァナンスが重要であると考えています。

スライドに「現実社会とカリキュラムの接点」とあります。大学教員というのは、大学の中で生きている場合、現実社会との関係は単純ではなく、複雑ですよ。社会に敵対的な人もいれば、社会親和的な人もいれば、没社会的という人もいますね。没社会的というのは敵対もしなければ親和的でもなく、超然主義ということですかね。こういう教員だけですと、学生にとってはやはりまずいわけです。学生は学問研究者ではないので、社会に敵対的でも親和的でも没でも困ってしまうのです。バランスよく社会とつながっていませんと、ついつい人生を誤ってしまうかもしれません。

そうした場合、学問研究をし、教育をしている人たちにも社会との接点というのが必要だと思うのです。それが大学ガヴァナンス責任部局の出番では

ないでしょうか。大学のガヴァナンス部局というのは大学の当局もそうですし、事務部局、人事や総務などもありますし、場合によっては学生部とか教務部もガヴァナンス部局です。こういう部局は学問的な利害というのを持っていません。学生を見る、社会との関係を見る、あるいは大学の評判を聞くなど、そういう情報に対して開かれているのです。社会の評価に、また、学生の評価に最も敏感ですね。しかし、大学の中にある専門性と一般市民のもつ全体性との事実的均衡として、ガヴァナンス部局にはある種の緊張が生じるのです。おそらく、大学の総長になれば、神経衰弱になるぐらい板挟みで苦しい思いをしているのではないのでしょうか。ところが一方、学部はこういう緊張関係から保護されています。学部の自治という防壁によって、緊張から保護されているのです。ところが我々、全学共通カリキュラムには、こういう学部の自治というようなものはありません。そのため、まともにこういった緊張が反映されてきます。

全カリは、10学部の交流の結節点でもあり、大学ガヴァナンス部局との結節点でもあり、最初に話しましたとおり、全学で支えるというものになっています。ですから、10学部の支持がないと動くことができません。1つの学部でも「絶対反対」、「そんなの許さない」と言ったら動かなくなってしまう組織なのです。ですから、常に各学部と仲よくしていなければいけません。学部も全カリを通して、お互いに相手をちょっと見合ったり、場合によっては牽制し合ったりする関係や、大学ガヴァナンス部局にかかる外からの圧力など、そういった緊張が見える場所なのです。全カリは教養教育として、学部に対して共通カリキュラムを実施すると同時に、ガヴァナンス部局

とも連携して学生の全体性に繋がる社会性をも導入したりもします。そうすると、全カリは学部とそれを上から支配しようとするガヴァナンス部局という利害の背反する組織のいずれからでも適当な距離を置きながら独自の均衡を維持する場である、ということができるでしょう。

そこにグローバル化という現実、現状の生活実感から由来する学生の知的不安、自己からの発信という学生のPDCA、これらが反映されてさきほどの均衡がうまく取れていると、全カリは教養教育としてうまく機能するのです。また逆に、全カリがうまく機能することによって、学生もグローバル化を受け止め、生活実感に基づく思考ができ、自己からの発信を行い、その結果PDCAが回って、全体性を自覚しながら、それらをさらに深く自覚するために積極的に社会や専門的学問を身につけて成長していくことができると思います。しかも、その際に学生たちは誰にも強制されることなく、主体的に勉強に向かうことになるのではないのでしょうか。

そうした場合に、全カリの運営で行われているような「均衡的ガヴァナンス」を維持しているということはとても重要だと思うのです。現在「ガヴァナンス」と言えばトップダウン的なガヴァナンスが文科省によって日本中の大学に推奨されています。ご存知かとは思いますが、教授会の権限を奪うような、学校教育法改正とか、国立大学法人法改正などもありました。しかし、トップダウンでは駄目だと思うのです。全体的な力の配分に配慮する均衡的なガヴァナンスこそが、大学カリキュラムの主体性、つまりカリキュラムの自立性を維持し、その中に位置する学生の主体性を育てるカリキュラムのあり方を維持し続けるために有効な

のです。私は全カリがそれを支える要である自覚を持つべきだと考えています。

そのためにこそ、個々の科目の担当者である先生方は、全カリ事務室を大いに利用してください。スライドに「個々の科目と全カリの均衡結節点の動きをつなぐ全カリ事務室」と書いてありますね。全カリのことをすべて分かっている職員がいます。どの科目のどの先生がどういう人で、学生とどういう関係を持っていて、この科目は学生からどういう評価を受けていて、大体成績分布はどのようなものか、ということを知っています。そのうえで、いろいろな部局、学部や総長室と調整しながら全カリの運営をしています。全カリ精神を体現している全カリ職員を頼りにしてください。ですから全カリ的な科目設計については、まず全カリ事務室で全カリの職員に聞いてみてください。もちろん、コアの教員もいます。

全カリが展開するすべての科目が、今日私が申し上げたような形でもって、全カリの精神を体現するように運営されたらいいなと思います、この半年間、全カリ運営に携わらせていただきました。これから秋学期が始まります。今後とも、全カリの総合科目のご担当をよろしく願いますとともに、日本の大学教育、とりわけ本学、立教大学の教養教育のさらなる発展、実質化に向けたご尽力を切に願います。そして、科目担当者の先生方のご努力をいただき、学生の主体性を喚起して、学生がみずから自分のために、主体的に自分の体を動かせる、そういう見識を身につけられるように、宇宙の果てまでのつながりを意識して、学生たちを大きく育てていただきたいと念じています。

ご清聴ありがとうございます。

○進行 佐々木先生、ありがとうございました。

残りの時間は質疑応答にしたいと思います。

○質問者1 兼任講師をしている者です。佐々木先生のご講演、大変勉強になりました。ありがとうございます。3つ質問があります。1つ目がやや長いのですが、大学教育が学生に主体性を求めるというのは、根本的に矛盾するのではないかと思いました。つまり大学が学生の先回りをして、たくさんの授業を並べて提供する。学生の先回りをして全15回のレジュメやパワーポイントやリアクションペーパーを配布する。学生はノートを取る必要がない。学生の先回りをして、評価基準を設けて評価をする。こういう大学の営みというのは、すべて学生の主体性をかえって阻む、あるいは邪魔をするような行為にも見えてしまうのです。そこで現在の教育と主体性が矛盾しないかどうかということをお聞きできればと思います。

第2点目は、大学生の卒業後3年以内離職率が3割を超えるというお話は、これは1970年からおよそ40年以上続いている傾向だと思います。どうしてこのお話の中で、この10年という限定をかけてお話しをなさったのか、その理由をお聞きしたいです。

第3点目が、大学生の生活が壊れているというお話がありましたが、これは具体的にどういう意味なのでしょう。例えば何か立教大学の調査で、立教の学生の生活が壊れているというような言葉をイメージするようなことになっているのか。あるいは、先生方、また職員の皆様方が、壊れているという印象をお持ちなのか、そのあたりのことをお聞きしたいと思います。以上3点でございます。

○佐々木 ありがとうございます。大学教育が学生の主体性を本来損ねるようなシステムになっているというご指摘ですが、私もそうだと思います。現状では、です。大学はすべて先回りをして、15回の授業を設計してやるというようなことは、本来の大学の学びとは違うというのが私の考え方です。というのは、学生が求めてくる、それに対して応えるというのが大学で本来あるべき姿だと思っていますので、シラバスを全部決めて、そのとおりにやるというのは全くその趣旨と違うんですね。むしろ学生が途中で、こういうことをやってくださいと言われて、路線を変更していくというのが本来あるべき姿なのではないかと思っています。

昔の私が大学教育を受けたころの大学には、そういう授業が幾らでもありましたが、次第になくなってまいりました。これはアメリカ型のカリキュラムのつくり方、授業の設計の仕方、運営の仕方、それによってアメリカが成果を上げているというようなことが一部で思われているからだと思うのです。しかし、社会的な背景が全く日本とアメリカでは違いますよね。日本の場合には、中等教育までは、ほとんど主体性など育たないように学校で保護されて育ってくるわけです。みんなに合わせる。横を見て、ハブられないように注意しないといじめられて殺されてしまう、というような教室環境が日本では強かったりします。だから、なかなか個というのは育たないわけですが、アメリカのような社会ですと、多分その個がしっかり育つような社会であって、しかも高校まで自由にいろいろなことに挑戦できるようになっていますよね。大学に入ったら少し「たが」をはめられて何かやるというような環境ですね。

そういう社会と、日本は全く違って

いて、先生のご指摘のとおりで、今、日本の大学の制度は学生の主体性を奪う方向にどんどん進んでいると思います。それを直すためにもトップダウンのガバナンスではなくて、学生の声も入れられるような均衡関係というんでしょうか、そういうバランスの取れた秩序という、ガバナンスの形態があればいいかなと思って、きょうのお話をさせていただきました。

それから2番目の新卒の学生の離職が3年間で3割というのが70年代から一貫しているというのは、お恥ずかしい話ですけど、私は存じ上げませんでした。私が読んで、たまたまこういうものを知っていたものには、少なくともバブル崩壊以降の傾向のように書かれていたものです。70年代というのは私が大学生だったころですけれども、そのころから、そんな傾向がもうあったのです。その原因についてもまた考えてみたいと思います。

それから、大学生の生活が壊れているということについてです。自分で、私たちのころをモデルに考えるわけではないですが、私たちの周りの人たちは、自分のやることに対して、自分で責任を持って生きていくという気概があったものです。しかし、今の若い人たちは、周りの環境に一方的に左右されていて、右往左往するという、そういう傾向が強いというように思います。これは単なる主体性がないというだけではなくて、そもそも自分の環境なり、意外な経験なりに対処する柔軟な、しなやかな知恵というものがないのではないかと思うのです。非常に硬直的に、愚直にぶつかって傷つくというようなことをやっているように見えますね。その辺も、やはり中高の教育の、どこに原因があるのか分かりませんが、現状はそうなので、大学としては、先ほど申し上げたような形でもっ

て、柔軟な知の経験、創造の場に参入させることによって、体ですることを含めて、何らかの経験をさせて、みずからの気づきにつなげていきたいと考えております。

○**質問者1** 分かりました。ありがとうございます。

○**進行** ほかにいかがでしょうか。

○**質問者2** 全カ리를担当しているものです。きょうは非常に興味深いお話で、参考にさせていただきました。タイトルが「全カリ・マジック」ということで、実際、中身、来る前は非常にもっと具体的な、全カ리의授業を担当する上でのある種の技巧とか、実践知みたいなことがテーマになるのかなと思ったのですが、実際の話は非常に大きい、まさに理念や学問の方向性とか目的に関わる話で、聞いていて非常に参考になりました。

1点だけお聞きしたいのですが、さっき、教員からの応答が大切だという話をされていましたが、人数が多いとどうしても応答ができないところがあると思うのです。実際、自分の授業も300人受講者がおりますので、もちろんコメントペーパーに返事をしますが、一生懸命やっても、せいぜい1回の授業で5人ぐらいしかできません。そのため、学生の顔と名前が一致することもないですし、全員に応答するというのは非常に難しいなと思い、なかなか苦労しています。そこで1つお聞きしたいのですが、全カ리를今のような形で運営していくということが決まっていた段階で、こういう大人数授業というものが、どういう形でできていったのかというのを、もし何かご存じだったら教えていただきたいと思えます。また、私の授業は300人程度の履修者だから、まだよいのかもしれませんが、このような大人数授業について、改善する動きというのがあれば教

えていただけますでしょうか。

○**佐々木** ありがとうございます。本来は、全カ리의講義科目は150人という規模を想定しています。ただ、時間割であるとか先輩からの言い伝えとか、いろいろな要因があるようですが、大人数になってしまう科目があります。以前は、放っておくと500人とか、600人とか700人というふうに履修希望が集まってしまう科目もありました。こうなりますと、ほとんど授業環境としては、まじめに出たい学生にとっては苦痛のような環境になってしまいますよね。そのため、現在は原則として全科目抽選という形にし、多くても300人程度におさまるようにしました。しかし、そうしますと、抽選に落ちた学生から猛烈な不満がくるのです。教育懇談会などの保護者が参加できる会でも、抽選に外れたというような意見があるのですね。高い授業料を払っているのに受けたい授業を受けられないのか、と。しかし、教員の立場としても、200人を超えると私語の制圧は難しいということをおっしゃる方もいます。もちろん300人でも静かな授業も多いのですが、200人を超えたら私語の制圧は難しいと一般に言われています。ですから、今述べたような学生からの意見、教員の考えに加え、財政的な制約、教室など大学の抱えている物理的な制約というものも考慮し、300人まで履修できるという制度にしております。大変ご迷惑をおかけしております。何とかしたいところではありますが、今後の課題というふうにせざるを得ないですね。

○**質問者2** 事情が非常によく分かりましたので、どうもありがとうございます。

○**進行** 最後にもう1件、質問を受け付けたいと思います。

○**栗田** 理学部の栗田です。先生のお

話、同意できる場所が多くて大変参考になりました。お話の中で、身体性というところが出てきましたが、何となく分かるのですが、具体例として、どういうものをもって身体性というふうにおっしゃっているのかを、お話いただけるとうれしいなと思っています。いかがでしょうか。

○佐々木 最も身体と遠そうな文学部を例にお話したいと思います。文学部で『源氏物語』を読むといった授業があるかと思うのですが、これは1000年も前のテキストで、最も社会から離れていて、現代の人間の感覚ではないように思います。そういうものを読んでいるわけです。それを好きな人が好きだといって趣味で読むのは、私は公共的な場で税金を使ってやるべきことではないと思っています。これは学問という名前の文化の私物化だと思っています。そういうことをやってはいけないという意味ではないですが、必ずそれに付随してくるものがあるからやっていいんだと、私は思っています。それは何かというと、今はそのまま生きられません、『源氏物語』の精神をいいなと思うことで、思わず自分が何かを見たときに、光源氏風に感じてしまうとか、そういうことができればいいと思うのです。そういうことができることで、文学は人を動かすものになります。また、人を動かすということは、ただその人が動いているだけではなくて、そのまわりにいる人たち、あるいは同じテキストを読んでいる人たちなどにも影響を与えることができるかもしれません。『源氏物語』は高校まで行った人はみな、おそらく一度は目にしているはずなので、その人たちが、何かほんのわずかでも、『源氏物語』に影響を受けた行動をその人がとれるということが、私には社会的意味があることで、ある種の社会の伝統と

か、文化とかというものを支えている重要なアイテムだというふうに思っています。そういった意味で、『源氏物語』を今の世にしこしこ読んでいることは意味があるというふうに思っております。

○栗田 どうもありがとうございます。

○進行 それでは本日の講演はこれで終わりたいと思います。